『覚悟の人』　佐藤雅美角川文庫
『忘れられた悲劇の幕臣小栗上野介』　村上泰賢　平凡社
『小栗上野介忠順と幕末維新』　高橋敏　岩波書店
『兵庫商社を創った最後の幕臣』　坂本藤良　講談社

特集

元漁師が日本開国に貢献 ジョン万次郎

加藤導男

はじめに

今年5月下旬、会員の早田信広さんが我家に来訪された。早田さんは現役時代には海外勤務が長く、国内旅行の経験が余りないことから奥様と愛犬とで、国内を旅されているとのこと。今回はお独りで四国一周され、そのお土産話の中で、高知足摺岬のジョン万次郎の銅像の話がでたが、今号の特集テーマに合致するので寄稿する事をお勧めした。しかし、早田さんは、投稿は遠慮されるとのことだった。

当方は今年の大河ドラマ『西郷どん』にも万次郎が登場し、興味もあったので、「ジョン万次郎」について紐解いてみた。

私は昭和五十一年創刊の吉村昭著『漂流』を数年後に購入した。

これは史実であり、天明5年（1781）一月、土佐国高知赤岡村の漁師・長平（二十四歳）他三名が出漁するも、時化に遭遇し漂流、絶海の孤島（鳥島）に漂着する。ただし、島には木もなく、飲み水もない。飛来する渡り鳥アホウドリを食するだけだった。しかし、漂着した仲間は次々と亡くなり、長平独りとなる。

年月を経て、他の難破船が島に着き、寄せ集めの材木等で船を造り、長平は、十二年四か月を経て、帰還したのである（後に東宝で映画化）。

吉村昭は、どの作品も徹底的に取材し、私はその筆致の迫力に感銘し、以後、同氏の殆どの作品を買い求めた。

※　※　※

◇十四歳で出漁遭難そして米国へ

ジョン万次郎は文政十年（1827）土佐国（高知県）幡多郡中ノ浜で、漁民の父・悦助、母・汐の次男として生まれる。

天保十二年（1841）一月、中ノ浜から百キロ程離れた宇佐浦（土佐市）から万次郎他四名は延縄（はえなわ）漁で出漁（万次郎十四歳）。暴風にあい、七日間漂流し、鳥島（奇しくも、前述の『漂流』と同じ）に漂着したのである。

万次郎は兄が病弱のため、十四歳で漁師見習いとして海にでたのであった。

飲み水にも欠き、アホウドリを捕らえ、その生肉やその卵を食するほかはなかったのである。

四月には地震が起こった。五月中旬にはアホウドリの姿も見えなくなり、仲間一同に無常観が漂うなか、六月を迎えたある日、島の東南洋上に船影を発見した。

アメリカの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」に救助されたのである。そこで万次郎の運命の人となる「ウイリアム・ホイットフィールド船長」と出会えたのである。

当時、日本は鎖国政策であったため、外国船が日本に近づくと、砲撃等を行い港に寄せ近づけない状態のため、ホイットフィールド船長は五人を連れてハワイに向かう。万次郎はよく働き、船員の人達にも愛され船長は船名のジョンをとって「ジョン・マン」の愛称を万次郎に付けてくれたのである。

ハワイに着くが、船長はアメリカ本土に向かうにあたって、万次郎「ジョン・マン」を帯同することを決め、一八四三年五月六日、マサチューセッツ州ニューベッドフォードに港に帰港したのである。

◇航海養成学校を首席で卒業

万次郎はホイットフィールド船長の援助により、ニューベッドフォードのバートレット・アカデミーという高等航海士養成の専門学校に入学でき、高等数学・測量術・航海術を懸命に学び、首席で卒業できたのである。この学校は当時、名門といわれ、アメリカ社会では最高学府といわれていた。

一八四六年五月、万次郎は十九歳の時、捕鯨船「フランクリン号」

に乗船、ニューベッドフォードを出港、大西洋・インド洋・太平洋を捕鯨航海するなか、一等航海士に昇格をする。その後はニューベッドフォードに帰港。

◇ついに生まれ故郷日本へ…

万次郎二十三歳の時、サンフランシスコを出港しハワイ・ホノルル漁師仲間二人と上海へ行くアメリカ商船に乗船、翌年一月、ボートに乗り込み、ついに沖縄本島摩文仁浜にて帰国に成功する。

そこから薩摩藩に送還され、島津藩主斉彬からアメリカ事情を詳しく問われた（この斉彬公に出会ったことが、後に万次郎の運命に寄与することとなる）。その後、長崎に送られ長崎奉行の取り調べを受ける。当時、船が難破して日本に戻ると、厳しい取り調べが待っていた。しかし九か月の後に、無罪放免となり、嘉永五年、高知に帰り土佐藩の事情聴取を受ける。

そして、十一年十か月ぶりに母の汐に会えたのであった。母は漁に出て、海で亡くなったと思い、近くの大覚寺に自然石を置き、毎朝お参りを続けていたのである。

そして三日後、土佐藩より呼び出しがあり、最下級ながら上士身分の「定小者」への取立てであった。「教授館」という土佐藩の学校であり、英語や西洋事情を若い武士に教育せよとの事だった。漁師から侍へなどと大抜擢であり、これは藩主・山内容堂の大英断や薩摩藩島津斉彬公の進言だともいわれている。

当時の聴講生には十九歳の岩崎弥太郎・板垣退助・竹内綱（吉田茂の実父）がいた。

万次郎が米国から持ち帰った「世界地図」に、当時十四歳であった後藤象二郎や十七歳の坂本龍馬も感嘆したといわれている。

◇江戸から出仕命令そして旗本に

嘉永六年六月三日、米国東インド艦隊司令長官ペリー提督が率いる黒船が浦賀沖に現れ、日本中が大騒ぎになった。浦賀奉行が「長崎に回航してほしい」と申し入れても意に介せず江戸湾深くに侵入し、測量船を下ろし勝手放題測量をしたのである。

要求書を渡し、「返事は来年受取に来る」と言い残し、江戸中を騒がせ、六月十二日に悠然と去っていったのである。

幕府の老中首座の阿部正弘より土佐藩に万次郎の江戸への出立を命じてきたのである。長崎の牧志摩守よりの「すこぶる怜悧にして、国家の用になるべき者」との報告があったこと。薩摩藩主島津斉彬公の「送り状」があったからともいわれている。

ペリーが去って二か月半後に江戸に到着し、徳川斉昭公や阿部等よりご下問を受け、万次郎が指摘した米国との問題点を次の四点に集約されている。

①米国は現在開発途上の国で日本に対し領土的野心はない。

②米国の基幹産業である捕鯨業務を円滑に進めるため、日本に薪水・食料の供給を必要としており、そのための条約を締結したがっている。

③日本近海での難破遭難・病人の発症などの場合、船員の適切な保護と治療。

④そのために和親条約を締結し、自由に寄港できる港の使用を願っている。

ついに幕府直参旗本となり「御普請役格」二十俵二人扶持となり、江川太郎左衛門の秘書となり、苗字も郷里の中ノ濱からとり、「中濱万次郎信志」と名乗った。

◇咸臨丸使節として乗船し米国へ

安政五年六月調印された「日米修好通商条約」の批准書を交換するために、米国首都ワシントンへと使節が派遣されることとなり、咸臨丸の最高責任者は木村摂津守、艦長に勝海舟、万次郎は通弁方主務として選ばれたのである。福沢諭吉は木村摂津守の縁戚であることから頼み込み選ばれた。

ただし、咸臨丸での船旅では日本人は船酔いで役立たず、万次郎一人が活躍したのである。

◇暴漢に襲われ、岡田以蔵が撃退

米国から帰国した江戸では万延元年（一八六〇）三月、桜田門外の変で大老井伊直弼の暗殺等「尊王攘夷」の動きが先鋭化されてきた。外国人に接触する者は身辺警護に万全を期していた。勝海舟は土佐藩の郷士で示現流達人の岡田以蔵を護衛として刺客から救われた。万次郎も海舟に勧められ、以蔵を護衛に頼んだのである。

万次郎は谷中墓地に生前から自分の墓地を建立していた。生前なので朱文字を入れようと訪れた時、いきなり抜刀した刺客が二人「国賊」「天誅」と叫び。襲ってきたのである。万次郎は六連発の銃を懐から取り出そうとした

ら、岡田以蔵が「それは危ない。動かないで下さい」と言って撃退してくれた。

（完）

参考文献

『ジョン万次郎』
永岡淳哉　新人物往来社
『ジョン万次郎に学ぶ　日本人の強さ』中濱武彦
KKベストセラーズ
『ジョン万次郎』
童門冬二　学陽書房
『ジョン万次郎』
中濱　京
冨山房インターナショナル
『ジョン万次郎』
西東　玄　明治図書出版
『漂流』
吉村　昭　新潮社

特集

勝てば官軍

瀬谷　俊二郎

今年で150年になる明治維新の光と影およびその後遺症を考えてみよう。

光の部分は新政府が、封建体制下の身分制を廃止し、西洋文明を積極的に取り入れ、憲法と議会を設け、アジアでいち早く近代化を成し遂げたという偉業である。

一方で影の部分は、天皇中心の皇国思想とそれを基とした富国強兵策で、これが植民地獲得競争と戦争への道を開き、琉球、台湾、樺太の南半分、韓国までの版図拡大、満洲建国から太平洋戦争での敗戦に至る原因となった。

1867年15代将軍徳川慶喜が大政奉還し、1868年王政復古の大号令で天皇中心の新政府が樹立され、翌年江戸が東京に改められ明治が始まったのだが、この直接の契機となったのが鳥羽伏見の戦いである。

小御所会議で王政復古が宣言され、徳川に対する辞官納地が決定すると慶喜は不測の事態が起こるのを回避するため大阪城へ退いた。このあと松平春嶽らは慶喜を新政府に参画させ、運用経費は各藩で応分の負担をするという方向で案をまとめ、岩倉具視も会津、桑名両藩の帰国と慶喜が軽装で上洛することを条件にこの案に同意した。

しかしこの案に反対であった薩摩の西郷・大久保「徳川排除（討幕派）」はクーデターを企て幕府を挑発した。

西郷は武力討幕に備えて益満休之助や伊牟田尚平を江戸に遣わし、浪人や盗賊を使って放火・略奪行為を働かせ攪乱工作を進めたため幕府は庄内藩に命じて薩摩藩邸を攻撃するという事件が起こった。

この報が大目付からもたらされると、旗本の諸隊、会・桑二藩の悲憤やるかたなく討薩・挙兵を慶喜に迫り「討薩の表」を掲げ、15,000の兵が京に向かって進発した。

勿論これは慶喜の軽装上洛とは大違いで薩長の思うつぼであった。周到な戦略・戦術や統一的な指揮・作戦もないまま、ひたすら鳥羽街道、伏見街道を密集縦隊のまま行軍した旧幕軍は待ち構える薩摩軍の格好の標的となったのである。

兵力比較では、5,000の薩長軍に対し15,000の旧幕軍。装備の点でも会津・新撰組は旧式であったが旧幕府歩兵はフランス式調練を受け火器の装備という点でも薩長軍と同等以上だったという。

旧幕府軍惨敗の最大の理由は薩長軍が「錦の御旗」を掲げて官軍となり、賊軍になることを恐れた淀藩・津藩の裏切りや慶喜自身の戦場離脱、海路による江戸への逃走などで旧幕府軍が戦意を無くしてしまったことである。

鳥羽伏見の戦いは、いうなれば薩長藩と旧幕府側の私闘であり官軍、賊軍として日本人同士が血を流して争うような義のある戦とは思えない。

このような場に錦旗を持ち出し、天皇を味方につけて成し遂げた明治維新の体質はその後そのまま日本の国体となって残ったのである。

イギリス・フランスの場合は絶対王政時代に・官僚制・常備軍・重商主義政策によって封建体制を打破しそののち近代的な国民国家が成立したという歴史がある。

日本の場合は、徳川家茂（18